目　次
Contents

18th Century engravings depict cultivation and production of cotton

Right: Cotton plant and seed-pod from which the cotton is obtained.
Below: A close-up view of an early type of weaving loom.

カバー写真：鶴田智昭（WPP）
カバー裏写真：菊池賢一（釜石市光陽写真）
カバーデザイン：鈴木学（WPP）

※本文内に記載の価格はすべて税込みです

コットンについての考察……4

コットンの世界地図……10

僕たちのカジュアルファッションはすべてコットンから始まった……12
JEANS／DENIM
PARKER
T-SHIRT
CONVERSE

コットンUSA
アメリカ綿花産業の歴史……20

ミシシッピー・デルタ地帯
コットンブルース……30

繊維の宝石
シーアイランドコットン
海島綿……32

2012コットンスタイリング……46

英国製コットン名品物語……70
JOHN SMEDLEY
SUNSPEL
CORGI

ニッポンのコットン……84
福助「海島綿足袋」
村上メリヤス「十月十日布」

和のコットン……90
誉田屋源兵衛
江戸一
オーガニックにコットンを着る……100

コットン・ウエア・ジャパン……110

永遠の定番をワードローブにもう一枚
チャンピオン・コレクション……114

コラム『卒業』文／高野秀士……124

コットン・コラム……128

コットンの基礎知識……132

奥付……144

参考文献
American Fabrics（Number 22/Summer1952）
もめんのおいたち（財団法人　日本綿業振興会）
人はコットンに帰る（日本紡績協会）
ミシシッピー＝アメリカを生んだ大河（講談社選書メチエ）

僕たちのカジュアルファッションは、すべてコットンから始まった

Photo/Tomoaki Tsuruda(WPP)

Photo/Champion

ヴィンテージ市場で人気が高いチャンピオンのグリーンタグ。リバースウィーブ ジップフーデッドスウェットシャツ。価格1万3440円。
問ヘインズブランズ ジャパン☎03-5361-2860

パーカ、この便利で洒落たキャンパスウエア

フード付きパーカは誰もが一枚はワードローブの中に入っているはずである。着心地の良さ、組合せの幅の広さ、耐久性の高さなどなど、学生にとってこれほど便利なウエアはほかにない。高価なアウターなど持っていなくても、暖かなパーカと自由さえあれば生きていける、などと考えていた時代は誰もが経験したはずだ。ヨロヨレのパーカを着ていても何も恥ずかしくなかった、いやむしろそれを誇らしいとさえ思っていた時代を。コットンという素材に「綿」や「綿布」と呼ばれていた時代とは明らかに異なる価値観が生まれた70年代は、カジュアルファッションがひとつの到達点にあった。だからこそ、いまの時代にも続く名品が数多く存在する。チャンピオンのリバースウィーブ フーデッド スウェットシャツもそのひとつ。とくに前開きのジップ フーデッドは、インナーのTシャツとの組み合わせが冒険できてとても便利なアイテムだった。そんな懐かしい時代のウエアを、箪笥の奥から引っ張り出したような70年代ヴィンテージ感あふれる風情で復刻。素材のドライ感や経年変化した風合いの演出、さらにハンドメイドによるクラッシュ＆汚れ加工など、まるで本物のヴィンテージアイテムのよう。大人になったいまこそ購入したいアイテムだ。価格1万3440円。オフホワイト、ブラック、ネイビーの3色。

英国製コットン名品物語

7つの海を支配した大英帝国は、その資源を求めるためどこの国よりも航海に積極的だった。そして、海外の植民地からもたらされたモノや原料は、多くの英国文化を形成していった。コットンもまた、そうした産物のひとつ。どこよりも高品質なコットンを独占できた英国では、数多くの名品ブランドが誕生した。

女王陛下もご愛用。シーアイランドコットンの代名詞「ジョン スメドレー」の逸品

初めて『ジョン スメドレー』のシャツに袖を通したときの感触は忘れられない。まるで絹のような肌触りと優しいフィット感。「なるほどこれは名品だ」と感嘆したものだ。海島綿といえば、まずジョン スメドレーの名前が挙がるほど有名なブランドであるが、ファインゲージに頑ななまでにこだわる同社は、現在も24ゲージ、30ゲージという2つのファインゲージニットを生産し続けている。とくに他社では真似のできない工程から生み出される30ゲージの製品は、超軽量のニットウエアとして同社の代名詞的存在であり、多くのファンがいる。伝統的な技術と最先端の科学技術を上手に融合させたスマートな企業。それは最高の素材と最高の縫製技術を追求してきた歴史が支えている。200年以上にわたって海島綿を守り続けた英国だからこそ、存在しうる唯一無二のブランドである。

イングランド・ダービーシャーの風景の中に、いまも同じように佇んでいるジョン スメドレーの本社工場。上の人物は長年にわたって会長職の座を勤め、同社の事業拡大に大きな足跡を残した四代目、ジョン・B・マースデン・スメドレー。海外市場への進出を果たした経営者でもあった。

ジョン スメドレーの歴史

1784年、産業革命初期に創業した同社は、英国ダービーシャー州リーブリッジ村で、ピーター・ナイチンゲールとジョン・スメドレーによって起業された。この地は丘陵に囲まれた水の豊かな場所で、流れる小川は動力と工業用水の確保に理想的な土地だった。ナイチンゲールとスメドレーは、ここで綿花を紡ぐ工場を開き、18世紀の終わり頃には靴下の製造や毛織物などを手がけるようになる。ちなみにピーター・ナイチンゲールはあの“白衣の天使”ナイチンゲールのおじにあたる人物だったそうだ。やがて同社の経営はジョン・スメドレーひとりで行なわれるようになり、二代目スメドレーの時代には、紡ぎから編み、縫製まで全工程を自社内で行なうという事業形態を確立して、飛躍的な発展を遂げる。現在の同社の基盤はすでに、この時代に築かれていたのだった。同族経営で発展した会社の歴史を見ると、必ずと言っていいほど天才的な閃きを持った経営者が現われているが、ジョン スメドレーの場合は四代目のジョン・B・マースデン・スメドレーが1888年に会長となり、当時最先端だった紡績機と編み機をいち早く導入し、現在の同社の代名詞でもあるファインゲージニットウエアの製造を開始したのである。素晴らしいのはすべてを機械まかせにしなかったこと。大切な工程は職人の熟練した腕にまかせることを止めなかった。現代でも、たとえば襟のリブはひと編みずつ手作業仕上げ。その贅沢さがブランドへの信頼を高めているのである。

取材・資料協力／ジョン スメドレー